目次

序 …… 3

私があるということ …… 3
それで、私とは？ …… 4
考えるということ …… 6
科学としての哲学 …… 7
文芸としての哲学 …… 9
本書の構成 …… 10

I　哲学の難しさと楽しさについて …… 15

哲学、このわけのわからない文章 …… 16
哲学の文脈と超訳 …… 17
おしゃべりを楽しむ人から書く人へ …… 20
様々な意匠 …… 21
宗教の問題 …… 22
疑うことと信じること …… 25
A は A であり、A でない …… 27
現代アートとしての哲学 …… 29
玉石混交 …… 31

II　哲学講義の実況中継 …… 37

第 1 講　ソクラテスとプラトン …… 38

「善く生きる」 …… 38
真善美の一致 …… 40
哲学者の神 …… 42
哲学的二元論 …… 44
われわれはどこへ行くのか …… 45

第 2 講　ソクラテスとヴェイユ
——さあ、もうそんなことは考えないようにしなさい …… 46
黄昏のポストモダニズム …… 46
ヴェイユ「そんなことは考えないようにしなさい」…… 48
すべてを明るみに出したうえで禁じること …… 51

第 3 講　アリストテレスと「実体」——存在論の始まり …… 54
万学の祖 …… 54
「実体」を追及すること …… 56
主語こそすべて …… 58
神への賛美 …… 61

第 4 講　トマス・アクィナス——一足早いルネッサンス …… 63
存在の原因としての神 …… 63
12 世紀ルネッサンス …… 65

第 5 講　アウグスティヌスとデカルト——神との対話 …… 67
物の論理ではなく …… 67
われ疑う …… 71
デカルト疑う …… 74
私は実体 …… 76
「考える」から「ある」へ …… 79

第 6 講　デカルトとパスカル——科学の運命…… 82
精神と身体の接点 …… 82
「無益で不確実なデカルト」…… 85
無限の空間の永遠の沈黙 …… 87
われわれの尊厳のすべては考えることの中にある …… 89

第 7 講　「明日も日がある」か？ ——ヒュームとウィトゲンシュタイン … 91
「明日も日がある」のは確かなのか …… 91
確実性の問題——語りえぬこと …… 94

第8講　ベーコンとロック——理性よりも経験 …… 97
知覚こそが出発点 …… 97
自然の精細 …… 99

第9講　スピノザ——考えることの楽しみと幸せ …… 103
神に酔える無神論者 …… 103
エチカ——倫理学 …… 105
ヘーゲルあるいはドゥルーズ …… 107
考える愉しみと満足 …… 110
直感知と知的愛 …… 112
悪をしりぞけ、死を恐れず …… 113

第10講　ライプニッツ——論理に置き去りにされる人間 …… 116
モナド …… 116
最小単位の「個」 …… 119
神の刻印 …… 121
理論的要請としてのモナド …… 123
スピノザとの邂逅 …… 125
カンディード——楽観主義のアイロニー …… 127

第11講　ヒュームとカント——経験論の衝撃 …… 131
独断論からの脱出 …… 131
経験を結びつけるもの——「観念連合」 …… 133
経験に先立ってあるもの——「先験的」 …… 135
物の本質は認識できない——「物自体」 …… 136
理性は無理でも実践は可能 …… 138
わが心のうちの道徳律 …… 139

第12講　ヘーゲル——世界は理性でできている …… 142
理性は客観的実在 …… 142
究極の理念 …… 144
弁証法論理と時間 …… 146
理念へと成長する概念 …… 148
理念から絶対理念へ …… 150

理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である …… 153
敬虔さにもかかわらず …… 155

第13講　ニーチェ——現代思想の原型 …… 157
ヘーゲル以降 …… 157
神は死んだ …… 158
大地と肉体 …… 160
名づけの力と制度批判 …… 162
ニーチェがアイドル …… 164
文芸的哲学 …… 165

第14講　ハイデガー——神なき存在論 …… 168
現存在 …… 168
述語としての「ある」…… 170
現代人の不安 …… 173
制作されてあるもの …… 177

第15講　ウィトゲンシュタインとマイケル・ポランニー——語りえぬもの … 179
『論理哲学論考』——ウィトゲンシュタイン …… 179
語りえぬもの …… 182
言語と価値の創造性へ …… 183
言葉にできるより多くのこと——マイケル・ポランニー …… 185
いわゆる暗黙知 …… 187
階層を上昇する …… 189
聖書的世界観あるいは進化思想 …… 191
言語と事実の乖離とポストモダニズム …… 193

おわりに …… 196

著者略歴 …… 198